

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第2巻2号、3-13

特集 東日本大震災10年とメディア情報リテラシー

震災の記録と記憶の伝承に向けて —震災伝承施設と震災アーカイブの果たす役割—

松本恭幸 岸川詩野

武蔵大学

1. はじめに

東日本大震災から10年を迎える2021年3月、宮城県の震災復興に向けた震災伝承施設として、石巻市でみやぎ東日本大震災津波伝承館がオープンする。既に同様の施設として、2019年9月には岩手県陸前高田市で東日本大震災津波伝承館（いわて TSUNAMI メモリアル）が、2020年9月には福島県双葉町で東日本大震災・原子力災害伝承館がそれぞれオープンしている。また被災地の各自治体でも独自に震災伝承施設を立ち上げているが、こうした施設の多くは、震災から何年かしてから設置に向けて具体的な検討がなされ、開館へと至っている。

一方、震災直後から震災の記録と記憶を伝承するため、震災後の被災地の姿や被災した人々の生活を、写真や映像で記録することに取り組んだ既存の地域の博物館・図書館や市民団体もある。そして震災の記録と記憶の伝承という点では、震災後に新たに誕生した震災伝承施設と目的は同じだが、その取り組みや内容には大きな違いがみられる。

本稿ではこの点について、東日本大震災津波伝承館⁽¹⁾、福島県いわき市の震災伝承施設として2020年5月にオープンしたいわき震災伝承みらい館⁽²⁾、宮城県気仙沼市に震災前からあり、震災直後から独自に記録調査活動を行ってそれをもとに常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」を行っているリアス・アーク美術館⁽³⁾、そして宮城県仙台市を拠点に「3.11からはじまる、まちと人のオモイデをキロクする」ことに取り組む市民団体である3.11オモイデアーカイブ⁽⁴⁾へのヒアリングを通して、震災の記録と記憶の伝承に向けた震災伝承施設や震災アーカイブの果たす役割についてみていきたい。

2. 近年誕生した震災伝承施設の取り組み

2-1 東日本大震災津波伝承館

東日本大震災津波伝承館は、「命を守り、海と大地と共に生きる～二度と東日本大震災津波の悲しみをくり返さないために～」をテーマに、津波の事実を浮き彫りにし、津波の実経験からの教訓を伝えるとともに、過去の津波災害への対応の歴史を学ぶ展示を目指して、館内を「歴史を

ひもとく」、「事実を知る」、「教訓を学ぶ」、「復興を共に進める」の4つのゾーンに分け、パネルや映像による展示を行っている。

震災津波の伝承・学習拠点としての機能、被災地域のコミュニティの歩みを記憶する装置としての機能以外に、三陸各地のゲートウェイとしての機能を持ち、道の駅高田松原と隣接して高田松原津波復興祈念公園内に立地することもあり、来館者の多くは地元以外の県内外から訪れている。総務担当副館長の熊谷正則によると、「開館からコロナの影響を受ける前の2020年3月末までの半年弱の期間で、15万人近い来館者があった」という。

東日本大震災津波伝承館の展示は、岩手県が県内各市町村、防災関係機関、NPO／NGO、新聞社等から提供された写真、音声、映像、文章等の資料をもとに構築した「いわて震災津波アーカイブ～希望～」を活用し、岩手大学、東北大学の協力を得て企画構成されている。東日本大震災津波伝承館には学芸員はいるが、阪神・淡路大震災の記録と記憶を伝える神戸市の人と未来防災センター、新潟県中越地震の記録と記憶を伝える中越メモリアル回廊のように調査研究機能を持たず、調査研究については岩手大学、東北大学が担い、そちらと連携する形になっている。

東日本大震災津波伝承館のユニークな特徴として、来館者の案内及び展示解説と、その合間に展示施設及び資料の保全、整理、あるいは教育普及事業の実施補助といった仕事を担当する専門の解説員を抱えている点だろう。10名の解説員の内、英語、中国語での開設が可能な解説員がそれぞれ2名いて、シフトを組んで勤務している。解説員のほとんどが何らかの形で被災経験を持った地元出身者で、自らの被災経験に加えて展示解説のためのトレーニングを受けて、展示解説業務に携わっている。「コロナの影響を受ける前の2019年度は、いわて花巻空港経由で中国語圏から来る観光客を対象に、中国語での展示解説が役立った」（熊谷）という。

岩手県では今後、県内の小・中・高校生に向けた復興教育・防災教育の拠点として東日本大震災津波伝承館を活用するため、2020年度に県内の小・中・高校で使う復興教育副読本『いきる かわる そなえる』の中で、東日本大震災津波伝承館について紹介し、多くの生徒に足を運んでもらおうとしている。2020年3月から事業担当の副館長が、県内の小・中・高校を訪問して、校長、副校長と利用促進に向けた意見交換をしており、今後県内の学校利用の拡大が期待されている。

東日本大震災津波伝承館



東日本大震災津波伝承館の熊谷正則副館長



2-2 いわき震災伝承みらい館

いわき市の震災メモリアル中核拠点施設であるいわき震災伝承みらい館は、県の施設である東日本大震災津波伝承館とは対照的に、「次世代を担う子どもたちの未来のために、事業活動全体

を通して学びの場を提供し、防災教育への活用を図ることで、災害に強いいわき市の礎を築く」ことを目的とした、地元の小・中・高校生を主な利用者層に想定する施設である。展示は、「東日本大震災と防災」、「震災の記録と記憶の保存・継承+防災・減災の知識と意識の醸成」、「いわきの現在～復興、そして防災～」、「追悼・鎮魂」の4つのゾーンで構成されている。

いわき震災伝承みらい館の展示に使われている資料を主に収集したのは地元のいわき明星大学（現医療創生大学）で、震災から半年後の2011年10月にいわき明星大学復興事業センターを立ち上げ、人文系の教員が中心となって震災記録の保存事業を開始した。そして翌2012年4月に震災アーカイブ室が開設され、大学が独自に市民から収集した写真、映像、証言記録等を保存していき、2016年度からはいわき市からの委託で事業を継続することになった。またそれまでに収集した資料はいわき市に移管され、アーカイブされたものの中から公開可能なものについては、いわき震災伝承みらい館のサイトで公開されている。

2020年5月にコロナの影響下で開館したこともあり、来館者の7割が市内からで、また本来のメインターゲットである「次世代を担う子どもたち」についても、いわき震災伝承みらい館館長の荒川信治によると、「2020年秋以降については、地元の小・中・高校からの見学の予約も徐々に入ってきている」という。またいわき震災伝承みらい館では、窓口となって地元の震災語り部を紹介しており、「館内を見学するだけでなく、震災時に市内で大きな被害を出した久之浜地区、薄磯地区、豊間地区等もセットで訪れ、被災地の現状や復興状況を多くの人に知って欲しい」（荒川）という。

いわき震災伝承みらい館



いわき震災伝承みらい館の荒川信治館長



3. リアス・アーク美術館の取り組み

3-1 地域の文化を伝える美術館として

これまで見て来た近年新たに誕生した震災伝承施設とはまた違った独自の震災を伝える取り組みをしているのが、リアス・アーク美術館である。

バブル期に計画されて1994年10月に開館した当時県立だったリアス・アーク美術館は、典型的な箱物行政の結果、開館時に美術品のコレクションに必要な予算がつかず、当初、地元の一般の家庭にある歴史・民俗系資料を集めて常設展を行い、美術展については巡回展で対応していた。ただ当初6,400万円あった年間の事業費も、数年後には1,000万円程度にまで減額され

て美術館の存続が厳しくなる中、2001年4月に常設展をリニューアルし、それまでに寄贈された100点余りの作品で常設の美術展を行うとともに、歴史・民俗系資料の展示については、「食」をキーワードに地域の歴史、民俗、生活文化を紐解く内容のものにして、「食」に関する地域の文化的な年中行事等を、手描きのイラストによる解説パネルで、美術館的に見せ方で紹介する常設展「方舟日記」をスタートした。副館長の山内宏泰によると、「新しいコンセプトで常設展を再構築したことで、地元を中心に来館者がかつての100倍近くになるとともに、その多くが長時間滞在するようになり、学校関係の利用やリピーターも大幅に増え、またこれをきっかけに地域づくり活動との連携も出来て、地域文化を魅力的に伝えるリアス・アーク美術館は地元になくてはならない存在となった」という。

その後、2004年5月にリアス・アーク美術館は宮城県から気仙沼・本吉地域広域行政事務組合に無償譲与され、広域行政組合の厳しい財政状況の中で運営されることになる。2006年9月から10月にかけて山内は、後の東日本大震災の時の津波被害に匹敵する死者・行方不明者を出した、明治三陸大津波をテーマにした「描かれた惨状—風俗画報に見る三陸大海嘯の実態—」展⁽⁵⁾を企画した。山内は、「三陸沿岸地域で津波は不幸にして起きる偶然の自然災害ではなく、歴史を振り返ると明治三陸大津波、昭和三陸大津波、チリ地震大津波と大規模な津波災害は40年程の間隔で起きており、これをきちっと文化的に位置づけて継承することが、次の津波災害の対策にもつながる」と考えて企画したものの、展示会場を訪れたのは1,200人程だった。

3-2 3.11後の記録調査活動

2011年3月11日の東日本大震災で、リアス・アーク美術館は津波の被害を免れたものの、地震による建物の被害は大きかった。そうした中で当時主任学芸員だった山内は、当時の副館長兼学芸係長、学芸員、看視員の4人で、3月16日から独自の判断で津波の被災現場の記録調査活動を開始した。

記録調査活動を急いだのは、「津波の被害に遭ったまちの最後の姿を記録に残そうとしたからで、これが記録に残ることで、被災者が被災する前のまちの文化的記憶を呼び覚ますことが出来るが、復旧・復興作業でかつてのまちの痕跡が一扫された後ではそれが出来ないため、記憶再生が可能な装置をつくるために必要だった」(山内)からである。

その後、3月23日に広域行政組合管理者(気仙沼市長)、及び教育委員会から正式に東日本大震災記録調査担当を任せられ、3月末で調査を補助していた看視員が退職した後は、3人の調査員で6月末まで被災地に通って記録調査活動を行った。ガソリンの入手が出来た4月以降は、気仙沼市内だけでなく、隣接する南三陸町にも出かけた。7月からは当時の副館長が館の復旧や文化財レスキューの仕事に携わるようになったため、山内ともう1人の学芸員の2人で記録調査活動を継続することとなる。

記録調査活動当初は、「Googleのストリートビューのような形で、1人でも多くの被災者にまちの記憶再生のトリガーとなるような写真を出来るだけ多く撮ることに努め、撮影時の状況については場所や日時以外に調査員が音声や文章で撮影意図等のコメントを残し、また撮影現場を歩

く中で見えてきたことを活動日誌として残した」(山内)。

5月に入って被災現場の写真が撮り貯まる中、山内達は写真だけでは被災現場の様子を十分に伝えきれないという思いを強く持ち、併行して持ち主の特定が不可能な津波の被害が伝わる遺物として「被災物」の収集を開始した。山内の考える「被災物」とは、「津波の破壊力、火災の激しさなど、物理的な破壊力等が一見してわかるもの」、「災害によって奪われた日常を象徴する生活用品や、震災以前の日常の記憶を呼び起こすようなもの」で、こうした「被災物」が被災現場を埋め尽くし、それは被災者が被災する前のまちの文化的記憶を再生するのに重要なモノだった。

「被災物」の選別は山内によると、「被災現場を歩く中で、目が合って離せなくなったものを収集した」という。すなわち津波で自宅を消失した山内を始めとする被災経験を持った調査員が、被災現場で見て自らの記憶がよみがえって経験を共有出来るモノを選んだ。たとえば被災現場で目にした津波で流された炊飯器は、津波以前の幸せな家庭の食卓や家族の風景といった多くの人にとって普遍的な記憶を再生するスイッチとなる。リアス・アーク美術館でそれまでアートに関わってきた調査員は、自らの経験を踏まえて「被災物」を選ぶ主観が、多くの相似する主観を持った被災者に共鳴して、コミュニケーションがとれることを信じて収集に取り組んだ。

5月以降の記録調査活動では、写真を撮影する傍ら、とりあえず現場から人力で運べるものを持ち帰った。6月末で初期の被災現場の写真撮影を中心とした調査活動は一段落し、それ以降は撮影した写真を整理する傍ら、館の再開に向けた準備や講演依頼への対応等を行い、その合間に復旧工事で風景が変わった地域があれば撮影に出かけた。「被災物」の収集については、10月から支援物資としてトラックがリースされたため、日用品以外の津波で破壊された建物の一部といった大型の「被災物」に関しては、当時まだ復旧作業が遅れている被災現場を訪れての収集となった。

一方、館の再開に向けた修繕について、被災地で他に多くの復旧工事が進行していることもあり、地元業者に発注出来たのが2012年2月末で、工事が終わって部分開館出来たのが2012年7月だった。8月までの間、2006年に行った明治三陸大津波をテーマにした『風俗画報』の図版の展示を改めて行い、9月から翌2003年3月まで従来の常設展のみ無料でオープンする。そして山内達は、2012年12月末まで記録調査活動を続けた後、それを展示するための準備をして、2013年4月3日に常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」がスタートした。

3-3 「東日本大震災の記録と津波の災害史」の展示

リアス・アーク美術館の常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」は、津波の被災現場の記録調査活動を行った山内ともう1人の学芸員で全て自作したもので、記憶媒体・記憶再生スイッチとしての資料として、「被災現場写真」、「被災物」、「キーワードパネル」、「歴史資料」の4つを展示している。

「被災現場写真」は、調査員が撮影した3万点余りの写真の内、分類する上で同じタグが付けられる同一現場で撮られた写真の中でベストのもの460点余りを選んでパネルにして、それに撮影時に現場にいた調査員が、何を考えて何を伝えるために撮影したのかについて書いたレポー

トを添付した。その中から 203 点が展示されている。

阪神・淡路大震災の後に震災伝承施設として誕生した人と未来防災センター等では、震災後に写真を始めとした資料を外部から収集したため、個々の資料の権利者にその活用について許諾を得る必要があって柔軟な資料展開が難しく、展示のリニューアルも簡単に出来ないことから、山内達は著作権の帰属にこだわって自ら写真撮影した。

通常、移動展等での写真の貸し出しについては、博物館資料としてパネルにしたものを貸し出すのが一般的だが、それだと空調等の管理が出来ている博物館相当施設等でないと貸せなくなる。だがリアス・アーク美術館では自ら著作権を持つため、デジタル化したデータを提供して貸出先でパネルを制作してもらうことも容易に出来る。

「被災物」は、インスタレーションのような形で展示され、収集した場所や日時とともに、ハガキ状の用紙に山内が創作したフィクションの物語が書かれて添付されている。これは従来の博物館展示の考え方からするとタブーだが、「展示の目的が資料展示ではなく、被災した人のモノに宿る記憶、すなわちそのモノを通して浮かぶ感覚や感情を、被災経験のない人も含めて共有し、震災によって何が失われたのかを知ってもらうことにあるからで、またそれを可能にしたのが美術館の展示であるから」と山内は語る。そして「東日本大震災の記録と津波の災害史」が、いわゆる復興事業として行っている展示ではなく、そのため「展示には震災からの復興という物語はいっさい入っておらず、震災後の最後のまちの姿から被災した人々の記憶を再生し、過去・現在・未来を繋ぐことに特化している」（山内）という。

「キーワードパネル」は展示資料の解説ではなく、「震災発生からの2年間、被災地で生活する中で得られた様々な情報や、調査活動から見えて来た課題などを【東日本大震災を考えるためのキーワード】として文章化し、展示資料と並行する形で添える」⁽⁶⁾といった内容のもので、108 点が掲示されている。これは震災について語る際に使用される言葉の意味を、改めて考えるための資料となっている。

「歴史資料」は、明治三陸大津波をテーマにした『風俗画報』の図版を始め、昭和三陸大津波、チリ地震大津波の資料、そして戦前、戦後の沿岸部の埋め立てに関する資料等が展示されており、大規模な津波災害が繰り返し発生することの文化的な位置づけがしっかりとなされなかったが故に、海で生計を立てていた人達が、津波のことを忘れて高台から沿岸部に移転した歴史について伝えている。

ちなみに気仙沼市には、被災した旧気仙沼向洋高校の跡地に気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館が 2019 年 3 月にオープンしたが、こちらは震災遺構として津波災害のリアリティを知るための施設で、一方、リアス・アーク美術館の「東日本大震災の記録と津波の災害史」展は、そうした人間の力ではコントロール出来ない津波に対して、どう自らの生き方や地域の文化を対応させていけばよいのか考えるための資料を提供するという位置づけで、役割分担を図っている。

3-4 今後の展望

震災前にリアス・アーク美術館を訪れる来館者のほとんどが地元のリピーターだったが、

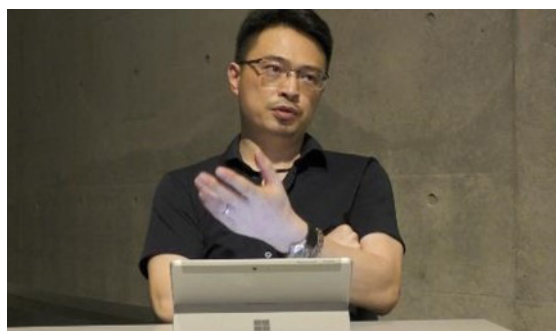
2013年4月に常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」がスタートしてからは、一時的に地元住民が多く訪れたものの、その後は9割以上が県外からの来館者となった。ただ教育利用は、2013年に地元の被災した学校から見学に来たのみである。

その大きな理由として、「子供たちに震災関連の資料を見せるのは、当時の悲しい記憶を思い出させてしまうため可哀想」という大人の理屈がある。だが「こうした理屈は、震災から10年経った今、震災について小学生なら知らないかほぼ記憶になく、中学生でも薄らとしか記憶がない中、もう通用しない」と山内は語る。「震災について知らない子供たちが、未来を守るために震災について学習して伝えて行かないと、三陸沿岸地域の文化はあの震災の経験を経てもなお何の進歩もしないということになりかねない」（山内）という。

そのため山内は今、地元の学校に来てもらうのではなく、YouTubeの映像で地元の子供達も含む多くの人に、広く発信していこうとしている。すなわち「リアス・アーク美術館の展示をベースに、震災について学ぶための様々な映像を制作し、それに英語でテロップを付けて海外にも発信するとともに、館内での展示解説や地元の小・中・高校に提供してタブレット端末等で観てもらうことに取り組みたい」（山内）という。

そしてリアス・アーク美術館としての最終目標として、「東日本大震災の記録と津波の災害史」展を見た人が、「自らの生き方や津波のような災害をもたらす自然と共存する三陸沿岸地域の文化について考えたことを、自分なりに創作を通して二次表現してもらい、次の津波が起きる将来に継承されていくことを期待したい」と山内は語る。そんな二次表現の作品として、鎌倉から訪れた小学生の女の子が被災物のくまのぬいぐるみを見て、それを題材にして描いた絵本のようなものも生まれている。

リアス・アーク美術館の「東日本大震災の記録と津波の災害史」の展示と山内宏泰副館長



4. 3.11オモイデアーカイブの取り組み

4-1 3.11の記憶を伝える写真集と写真展

東日本大震災発生直後から被災地の姿を写真等で記録に残したのは、リアス・アーク美術館のような地域の博物館や図書館⁽⁷⁾以外に、市民団体によるコミュニティ・アーカイブ活動がある。そうした市民団体の1つに、2009年6月に仙台市で設立されたNPO法人20世紀アーカイブ仙台がある。

NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台副理事長でその震災アーカイブ部門から誕生した 3.11 オモイデアアーカイブ代表の佐藤正実によると、「20 世紀アーカイブ仙台では、市民がアーキビストとして仙台市とその周辺地域を中心に、これまで市民の記憶を記録する 3,000 本余りの 8 ミリフィルムによる市民の映像と 1 万点余りの写真を収集し、それを活用した上映会や展示館を開催して、参加した多くの市民が語り合って懐かしんでもらう活動を行ってきた」という。

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起きた後に佐藤は、「1995 年の阪神・淡路大震災の際に、震災後の写真等の資料収集が遅れ、更地化される前の被災した地域の様子を記録した写真が、必要な情報をタグ付けした形で充分に残されていないことから、20 世紀アーカイブ仙台の Twitter のアカウントで、炊き出しや給水の行列の写真、停電した家庭での食事風景といった、いろいろな市民生活の現場の写真を中心に提供を呼び掛けた」。そして 4 月に、「3.11 市民が撮った震災記録」のサイトを立ち上げて、そこで提供を受けた震災後の市民生活が分かる写真に、エリアと時間軸で分けて掲載する形で、市民による震災記録プロジェクトがスタートした。この取り組みが地方紙の河北新報で紹介されたことで、さらに多くの市民から写真が提供された。

その後、9 月から 11 月にかけて 20 世紀アーカイブ仙台では、写真を提供した市民が、いつどんな想いでその写真を撮ったのかについて、45 名の提供者にヒアリングを行った。ヒアリングした人の年齢は 10 代から 60 代まで、男女比はほぼ同数で、そのほとんどが趣味で写真を撮っていたのではなく、SNS にアップして身近な人に震災の様子を伝えるため、身の回りの様子を撮ったものだった。

佐藤がこうしたヒアリングを行ったのは、「過去に先人が残した津波関連の碑文が伝わらずに大きな被害を招いたのと同様、単に写真を集めて見せるだけでは将来に伝わらず、写真を撮った人が伝えたい生の言葉や綴られた文章、場所を示す地図、時間軸となる年表、そして定点撮影の形で変化を記録し続けることが合わさって、過去のことを将来に伝えることが出来る」と考えたことによる。

こうした取り組みを経て 2012 年 3 月、震災発生当時の写真、写真提供者の証言、震災から 1 年間の年表、津波被災現場の地図が掲載された写真集『「3.11 キヨクのキヨク」市民が撮った 3.11 大震災 記憶の記録』が発行される。ただこの時点ではまだ定点撮影の写真は含まれておらず、翌 2013 年 3 月に同じ場所で撮った写真を加えて編集した写真集『3.11 キヨクのキヨク、そしてイマ。』が発行された。

20 世紀アーカイブ仙台（及び 2016 年 4 月に震災アーカイブ部門が独立した 3.11 オモイデアアーカイブ）では、これまで 3 万点余りの震災後の写真を収集しており、写真集にまとめる以外にも、様々な写真展を行っている。特に大きな話題となったのは、仙台市の複合文化施設であるせんだいメディアテークが 2011 年 5 月にメディアを活用した震災の復旧・復興を支援するために立ち上げた「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」と共働で企画した、「3 月 12 日はじまりのごはん」がある。これは震災の後に最初に食べたごはんはどんなものだったのかをテーマに、炊き出しや食事の風景を写真で紹介したもので、来場者は自らの当時の生活について思い

出したことや感想を、自由に写真の周りに付箋で添付することが出来る。

4-2 被災地ツアーでの活用

20 世紀アーカイブ仙台による収集した震災後の写真のユニークな使い方として、「3.11 オモイデツアー」がある。これは震災以前の沿岸部の写真を見た参加者を、その風景が消失した震災後の沿岸部に案内し、喪失したかつてのまちの姿を想像したり（かつて訪れたことのある人に）思い出したりしてもらうとともに、震災以前から沿岸部に住んでいた語り部となる地元の人に、辛い震災体験の記憶を語ってもらうのではなく、写真から想起される震災以前の豊かな暮らしの思い出について語ってもらうというツアーである。

「3.11 オモイデツアー」が誕生した経緯として、20 世紀アーカイブ仙台では「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」と共働で 2012 年 5 月から「みつづける、あの日からの風景」という公開サロンを定期的で開催しており、こちらで被災した沿岸部の写真を撮影した人から話をうかがっていた。そしてこの公開サロンの中で県外から来た参加者から、沿岸部を訪問するツアーがないという話が出て、そうした要望に応えるために企画したのが「3.11 オモイデツアー」だった。

最初に 2013 年に行った時は、「もういちど見てみよう 3.11 ツアー」という名前で、被災した沿岸部の蒲生、荒浜、閑上の各地区をルートで案内して、各地区の成り立ちや生業について説明するものだったが、県外から参加して初めて訪れる人にとって震災後の風景を見るだけではなくイメージがわからなかった。そのため翌 2014 年にやり方を変えて、3 地区をルートで案内するのではなく、各地区を個々に訪問して滞在する形にして、地元の人と交流を深め、リピーターになってもらうことを目指す「3.11 オモイデツアー」にした。

4-3 残された課題

現在、3.11 オモイデアーカイブが持つ 300 人余りの市民が撮影した 3 万点余りの写真は、撮影者から 3.11 オモイデアーカイブ、及び 3.11 オモイデアーカイブが許可した組織で使うことが出来る取り決めとなっている。この内、将来、デジタルアーカイブ化する上で必要なタグ付けがされたものは 1,000 点程である。これはタグ付けにかなりのマンパワーが必要なのと、あと佐藤自身、「手間をかけてタグ付け作業をしてデジタルアーカイブ化しても、それによってどれだけ利活用されるのかが不透明で、現時点でそうした作業に注力することが出来ない」と考えているところがある。

すなわち震災翌日、停電した中でローソクの灯りをともして食事している写真は、単に「3 月 12 日」、「停電」、「ローソク」といったタグを付けても意味がないが、「3 月 12 日はじまりのごはん」のような文脈を提供することで、いろいろな人のいろいろな体験の記憶がその写真とリンクして再生される。タグ付けを通してある意味で写真の情報を絞り込むのではなく、リアス・アーク美術館の山内が取り組む被災した人々の多様な記憶を再生することを、佐藤もまた重視している。

3.11オモイデアーカイブのサイト



3.11オモイデアーカイブの佐藤正実代表



5. まとめ

これまで見てきたように東日本震災から数年経って設置に向けた具体的な検討がなされ、近年開館した震災伝承施設は、震災から10年経つ中で多くの人の記憶から震災を風化させないように、県や地元自治体の震災アーカイブを活用してパネルや映像による展示を構築し、入館料も無料にして多くの来館者に来てもらう仕組みをつくっている。

東日本大震災津波伝承館は、三陸各地のゲートウェイとしての機能を持つことで岩手県の内外から多くの来館者を集め、また外国語対応が可能な解説員の制度を設けた。その一方で県内の小・中・高校生に向けた復興教育・防災教育の拠点となるよう、利用促進に向けて学校との連携を重視している。いわき震災伝承みらい館は、地元の小・中・高校生を主な利用者層に想定し、防災教育への活用に力を入れている。また地元の震災語り部ツアーとの連携も図っている。

ただ震災後に誕生した施設ということもあり、リアルタイムに被災現場の写真等の震災関連資料の収集を自ら行うことが出来ず、県や地元自治体の震災アーカイブに頼って展示を構築せざるを得ず、また展示の内容は震災から復興までのプロセス全体を取り上げたものとなっている。

これに対してリアス・アーク美術館、3.11 オモイデアーカイブは、震災時に博物館、市民団体として存在し、地域の文化を伝える活動に取り組んでいたことで、その当事者が自ら震災直後から被災したまちの最後の姿や震災後の市民の日常生活を記録する写真の撮影や収集と、撮影者の想いを文章で記録に残す作業、さらに被災者が被災する前のまちの文化的記憶を再生するためのモノとしての「被災物」の収集といったことを行うことが出来た。そして両者とも、撮影や収集した写真をもとにアーカイブを構築することが目的ではなく、その写真をもとに被災者が被災する前のまちの文化的記憶や被災後の日常生活の記憶を再生し、また被災経験のない人にもその記憶を共有してもらうことで、震災の記憶を正しく将来に伝えるといった利活用に重点を置いて、展示や被災地ツアーに取り組んで来た。

こうした取り組みは震災後に新たに誕生した公的な震災伝承施設では困難なことで、今後、東日本大震災に続く南海トラフ地震等の大規模災害の発生が予想される中、各地域では過去の大規模災害の記録と記憶をもとにそれに備えた災害対応の仕組みを準備するとともに、地域の博物館・図書館や市民団体等による新たに発生する大規模災害の記憶と記憶を正しく残して伝える仕

組みを構築することも重要である。

- (1) 2020年7月25日に行った、東日本大震災津波伝承館（いわてTSUNAMIメモリアル）副館長兼岩手県復興局副局長兼震災津波伝承課総括課長の熊谷正則へのインタビューにもとづく。
- (2) 2020年7月28日に行った、いわき震災伝承みらい館館長の荒川信治、主査の武田真一、いわき市市民協働部地域振興課中山間・沿岸地域係長の高津紘治、そしていわき震災伝承みらい館の展示で使われている資料の収集を行った医療創生大学の坂本美穂子へのインタビューにもとづく。
- (3) 2020年7月26日に行った、リアス・アーク美術館副館長の山内宏泰へのインタビューにもとづく。
- (4) 2020年7月27日に行った、NPO法人20世紀アーカイブ仙台副理事長兼3.11オモイデアーカイブ代表の佐藤正実へのインタビューにもとづく。
- (5) 明治三陸大津波の後に当時の大衆雑誌『風俗画報』が現地取材して、臨時創刊『大海嘯被害録』を3巻発行しており、その中で絵師が描いた図版70点を複写拡大してパネルにして展示した。
- (6) 山内宏泰編（2014）『リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館、3頁
- (7) 図書館による取り組みとしては、宮城県東松島市の東松島図書館による「ICT地域の絆保存プロジェクト」による震災アーカイブの構築が有名である。